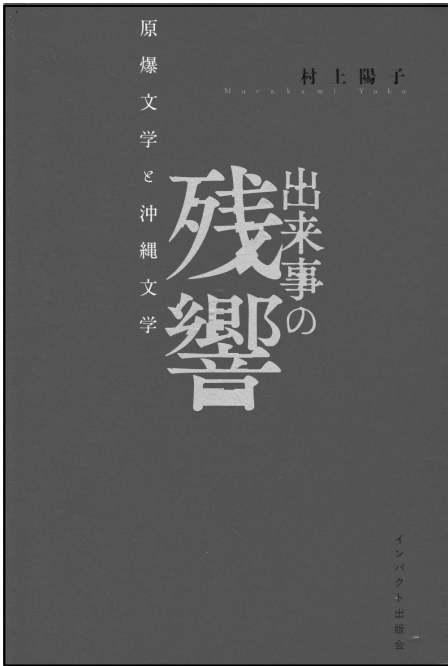


村上陽子著 『出来事の残響』 ——原爆文学と沖縄文学——

茶園梨加



二〇一六年四月と五月、日本・米国の両国にとつて、二つの大きな出来事があった。四月、米軍嘉手納基地に勤務する三二歳の男が、うるま市の二〇歳の女性をレイプし殺害、恩納村の雑木林に遺棄するという事件が起きた。五月、遺体が発見され、犯人が逮捕される。同じく五月、オバマ大統領が米国大統領として初めて広島市を訪問した。一九四五年八月の原爆投下と、沖縄占領、占領後の基地問題を象徴する二つの出来事である。報道を目にしながら、改めて文学作品や、証言や、聞き書きや、過去の歴史そのものを、いま〈読むこと〉はどれだけの力があるのだろうか、と考えている。私のなかですぐに答えは出ないが、〈原爆〉と〈沖縄〉という異なる出来事を共に論じた村上陽子『出来事の残響』を頼りに、思考を続けていきたいと思った。

著者の村上陽子は、本書の序章において、破壊的な出来事での語ることのない存在は、それでも空気を震わせている、と綴る。その響きを「出来事の残響」と捉えている。原爆文学と沖縄文学は背景にある歴史や文化、文脈は大きく異なっているのだが、「出

来事をありのままに書こうとする努力や語りきれないものへの直面、その出来事を引き起こした国家の責任を問うこと、体験を持たない者に出来事を伝えようとする試みなどは、原爆文学と沖縄文学の双方が向き合ってきた問題の一部である。二つを共に論じることは、戦後日本のあり方を問い直すことにつながる。「原爆文学と沖縄文学を一つの文脈に回収しようとするのではなく、二つの渦のせめぎ合いの中に身を置き、文学作品を読んでいくこと」、それが、本書での著者の目的、立場である。

構成は年代順である。以下に各部のタイトルと共に、() 内に対象の年代・作家名・主な作品名を挙げる。

序章

第一部 原爆を書く・被爆を生きる

第一章く第三章(一九五〇年代・原爆文学・大田洋子「ほたる」

『日市歴訪』のうち)「半人間」

第二部 占領下沖縄・声なき声の在処

第四章く第六章(一九六〇年代後半く七〇年代はじめ・沖縄文学・長堂英吉「黒人街」、大城立裕「カクテル・パーティー」、

嶋津与志「骨」)

第三部 到来する記憶・再来する出来事

第七章く第九章(一九七〇年代後半く八〇年代半ば・原爆文学・

林京子「祭りの場」『ギヤマン ビードロ』、井上光晴『西海原子力発電所』)

第四部 いま・ここにある死者たちとともに

第十章く十二章(一九八〇年代く九〇年代・沖縄文学・又吉栄喜

「ギンネム屋敷」、目取真俊「風音」「水滴」)

終章

原爆文学と沖縄文学が三編ずつ、交互に論じられている。全体像を概観すると、この逆の流れ、つまり、一九五〇年代沖縄文学から始まり、一九九〇年代原爆文学で終わる流れならば、いかなる作品が選ばれるか。そしてどのような違った地図が描けるだろう、という想像もわく。書評者は、二〇一六年五月十四日に開催された第五〇回原爆文学研究会(於・山口大学)において、本書の書評を担当したが、その際の著者の回答にあったように、構成は、原爆文学、沖縄文学のそれぞれの、停滞や拡がりや密接に繋がっているという。例えば、一九五〇年代の沖縄文学は、日本軍の兵士目線の証言が多く、一九七二年の「本土復帰」を経て、七〇年代後半から八〇年代半ばは沖縄文学の停滞期であった。そのような文学史的事項を序章等で示しても良かったかもしれない。もちろん、既存の文学史の枠内でのみ考察を進めることは、本書の目的とは異なる。著者は、文学作品を分析の対象とすることで、出来事はより重層的な文脈に開かれていくはずだと記している。「そしてそれは、記憶や体験が受け渡されるきわめて小さな、しかし複数の回路を示して、国家の原理や大きな物語に回収されることへの抵抗につながっていくのではないかと思われる」(一一頁)。

原爆文学と、沖縄文学を、共に見ていこうとする試みは、既存の文学史研究では捉えきれないものである。

全ての章についてここで細かく纏めることはしないが、本書全体を語るうえで、私が特に象徴的だと感じたのが第六章であった。

鳴津与志「骨」を論じた第六章では、体験の継承の困難さのなかで、日々実践されている分有の試みが論じられている。本土資本による沖繩の開発がテーマのこの作品では、開発工事の過程で、沖繩戦で亡くなった人々の遺骨が地中から掘り起こされる。それらの遺骨は、「性別・年齢・国籍を確定することができない」。

著者は、「復帰」前後を貫く構造的暴力の構図の中で、常に日米両政府が強く結びつきながら人を殺し、地を削りつづけてきたことをこそ暴いていかなければならない」と強く論じている。ホテル建設の結末、つまり「負け」は作品には描かれないが、「その開かれた結末こそが、一日、また一日と引き延ばされていく遅延という時間と、抵抗の場が生まれる可能性を留め置いている」。

この作品は、一九七三年を舞台としている。だが村上は、現代にも続く沖繩の問題としたうえで、名護市辺野古への海上基地建設、東村高江へのオスプレイパッド建設の現場では、多様な世代、ジェンダー・セクシュアリティ、出身地を生きる人々による長年にわたる抵抗運動が形成されてきたことに触れる。文学作品の読解は、それがいかなるテーマを持った作品にせよ、現実の問題と切り離して考えることはできない。村上の「骨」論は、いまこの瞬間も続いている抵抗運動をも視野に入れながら、あくまでも作品読解によって回路を示す試みだと思う。そういう意味において、著者の姿勢に私は深く共感をおぼえる。

さて、本書は先に記したように、大田洋子に対する批評を論じた第一章以外は、各章一作品を対象としている。作品について、同時代評価や先行研究を示した上で、さらに論者が新たな作品読解を行うという作品論の形態を採っている。そういうこともあり、

論者によって示される各作品の要約や、複数の本文引用によって、作品を読んでいなくとも各論に分け入っていくことができる。ただし、読書行為はそこで閉じられているのではない。本書で対象としない他の原爆文学や沖繩文学、さらには、「原爆」や「沖繩」を描いていない他作品とどう響き合うか、想起しながら読者は読みすすめていくのではないだろうか。

例えば、大田洋子への批評を批判的に検討した第一章では、森崎和江の仕事が想起された。「自らとは異なる場所、異なる階層、異なる体験を生きながら、被爆者であるという一点において「同じ位置」にある人々をどう見つめ、描くかが模索されたのが『夕風の街と人』であった」(二七頁)。森崎にとつて「植民二世」として、「正反対の」人々であった「からゆきさん」や在日朝鮮人とどう出会うかという問題は、戦後の日本で生き直していくために必要なことであった。大田にとつても、第一部のタイトルにあるように、被爆を生きたために方法を模索しながら書き継いでいったことに気付かされる。また、同じように森崎の「からゆきさん」が思い起こされたのは、林京子『ギヤマン ビードロ』を論じた第八章であった。上海で幼少期をすごし、一九四五年に日本へと移る林京子の、性をひきく存在の「お清さん」「島」へのまなざしは、立場の異なる人々と、いかに向き合うかという問題に誠実であろうとする作家の姿が伺える。第七章では、林京子「祭りの場」について語りの重層化を論じている。「記憶や他者の声が「私」に依り来たることによつて「祭りの場」の語りは構成されていく。その語りは「私」という一人の語り手に収斂されることなく、さまざまな認識や体験へと拡散し、複数の声が輻輳する

場を形成していく。モザイクのような語りに潜勢する複数の声は、整序化され、統一されることに抗っている。「語りの場」という作品は持続する破壊を語る多声的な言葉が響く場なのである（一六一頁）。論者の言う「せめぎ合う語り」は、石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』（講談社、一九六九年）の語りにおいても見られる特徴だろう。医学資料、新聞記事などの資料と、水俣病に深く関わらざるを得なくなつた登場人物の語り（「重症」患者や患者の家族）もまた、「せめぎ合う語り」として、「私」に収斂されない。私小説だと論じられながら、その重層的な声の集積という点において、二作品は接続している。著者が各作品を通して貫いた多声性や、分有の試みといつたトピックスは、〈原爆〉や〈沖繩〉以外の出来事とも連結し、あらたな共振へと繋がるはずだ。

そのうえで本書を読んで、疑問に感じ、さらに考えたいことがある。原爆文学と沖繩文学をそれぞれ個別にみることで捉えられない視点、共に論じることで初めて見えてくる視点とは何か、ということである。例えば、終章でまとめられているように、軍事占領がもたらした分断（第一部と第二部）や、体験を持たない者が出来事の痛みや記憶に共振する瞬間を拾いあげている（第三部と第四部）こと、さらには、ジェンダー的な政治力学によつて各論が結びついている。それでも、まとめられた共通する視点は、果たして、個別にみることで捉えられないものだろうか。各章が証言できない主体を重層的に捉え、分有の試みを示唆していく論述形態は、共鳴できるものである。ただ、一つの章のなかで原爆文学と沖繩文学の分析が混ざり合うことは、ほとんどない。一つ一つの作品のレベルで、どのように具体的に響きあうか、とい

つた検討は、読者の読解に委ねられている。村上は、林京子『ギヤマン ビードロ』を論じた第八章で、沖繩戦体験の分有の可能性を論じた屋嘉比取『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』（世織書房、二〇〇九年）を引用している。このような箇所は、もつとあつてもよかつたのではないか。原爆文学研究の領域だけでは引用されない先行論や資料を引用し、作品読解につなげることは、沖繩文学という別の領域をもう一つの軸として共に考えようとする本書だからできることだろう。

また、〈原爆〉や〈沖繩〉が描かれた作品を対象とし論じることは、被爆者たちの現状や米軍基地問題など、現在も続いている問題を抜きには成立しない。そのことは著者の切実な姿勢として感じたところであつた。同時に本書では作品論のかたちをとり、現実の運動とは一線を引いているようにも思えた。現実の抵抗運動と作品分析の接点を示しながら、それでも文学研究でしかみえてこないことは何か。作品読解と、抵抗運動の接点・相違を考え続けたい。

繰り返しになるが、〈沖繩〉と〈原爆〉の二つの軸を論じた本書は、それ以外の出来事を（読むこと）の試みへと、可能性が開かれていだろうか。個別の出来事を対象としながら、他の出来事との共振のなかでものを考えていく。そのような視点を本書は果敢に提示し、読者に要請している。現在も日々起こる悲劇的な出来事といかに向き合うか、ということにも自ずとつながっていくように思う。

二〇一五年七月八日 インパクト出版会 二九九頁 二四〇〇円＋税